

調和ある多様性に向けての新しい心理学の構築

① 計画の概要

グローバル化が進む中、社会の分断化がさまざまな次元で進んでいる。実世界においては、紛争やテロ、貧困、人権の抑圧、多面化する環境問題などの脅威・課題が深刻化している。そうした状況は、個人の心に閉鎖的な思想をはびこらせる。実世界における社会の分断化は、仮想世界における分断化による影響を強く受けている。不特定多数の個人と自由につながることを可能にするインターネットの世界では、実世界の社会システム維持に必要な慣習や制度（秩序）を考慮することが軽視される。多様性を認め、維持するための議論は排除され、同じ価値観、思想をもつ個人だけが自由に集まり、仮想社会を形成し始める。なぜ現代社会に生きる我々の心は、分断化に向かうように働いていくのか。どのようにすれば、分断化する心の働きを克服し、調和ある多様性の実現に価値をおく心を働かせることができるのか。深刻化の一途をたどるヒト社会の分断化問題の根幹を理解するためには、多様なヒトのもつ心の働きの本質と、それが創発・発達する原理の科学的解明が必須である。そして、人類の未来社会を担う次世代の心の教育へと適切に生かさなければならぬ。この目標に向け、本計画では、心理学、認知科学、霊長類学、発達科学、脳神経科学、分子生物学、精神医学、実験社会科学や、ロボティクス、人工知能などの工学・情報科学領域も交えた多数の研究者たちが各拠点で構築してきたユニークな実験環境やデータベースを互いに共有し、上記課題に対する解を見出し、学術的責任を世界に先んじて発信する未来学術システムを推進する。年齢、社会環境、文化、進化、障害などによって生じる心の多様性を総合的な視点で理解し、分断に向かいがちな心の仕組みと、それを乗り越えるための心の戦略を明らかにする。そして、社会の分断を調和ある多様性を背景とした多元的な共生社会を構築するための具体的な「フューチャーデザイン」を提案する。

② 学術的な意義

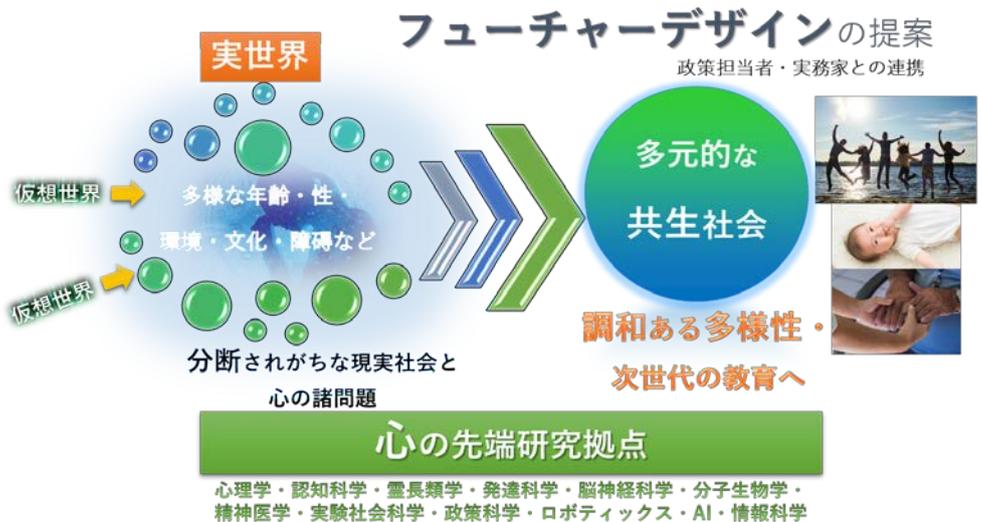
心理学は、その成果が人類の幸福に資するものとして実世界で直接的に検証され、疲弊し分断された現代社会に「真に資する」学問であらねばならない。こうした理念を核として、本マスタープランでは、多層的に分断化した社会に対して「調和ある多様性に基づく多元的共生社会の提案」という目的を、明確かつ具体的に掲げる。そのための方法論として、情報科学から社会科学までを俯瞰する領域の多層からなるネットワークを構築することを重視する。実世界での人間の精神活動に関する真に有効な大規模データを収集し、データサイエン

スやAIの進歩とも連携しながら、人類の未来に対して心の先端研究としての新たな役割を果たす。これは、個人や社会から得られる多様なデータを、質の高いものとして収集・解析しうる手法の提案に貢献するものである。個人情報などを配慮した上で、他分野との連携により、これらのデータをさらに有効に生かす道筋も積極的に提案できる。現在、情報技術を生かしたロボット開発が国の政策として推し進められている（経済産業省「ロボット新戦略 2015」）。ただし、心の先端研究に身を置く立場からみると、現状で描かれている将来ビジョンは、進化の所産として生物が獲得してきた生体システム、そのメカニズムや機能、そして進化的意義と発達の側面を十分に考慮して設計されているとはいえない。本マスタープランが発信する成果は、人類がAI、ロボットとの共生社会に何を期待しているのか、誰のための技術開発、未来設計なのか、人類がどのような環境を未来に繋いでいくべきかを考えるうえでの「かじ取り役」の役割を果たすことは間違いない。

③ 国内外の動向と当該研究計画の位置づけ

これまで、日本国内ではマスタープラン 2010「心の先端研究のための連携拠点（WISH）構築」が日本学術振興会最先端研究基盤事業に採択されて以来、2017年のマスタープランにいたるまで、心理学・認知科学、脳科学、発達科学、霊長類学、進化学、認知発達ロボティクス、精神医学、実験社会科学などの文理連携研究拠点を基盤とした「心の先端研究のためのネットワーク」を構築し、心の先端研究を推進してきた。それにより、他者との相互作用による心の働きの原理、すなわち、その認

調和ある多様性に向けての新しい心理学の構築 Establishment of New Psychology for Diversity in Harmony



多様なヒトのもつ心の働きの本質とそれが創発・発達する原理の科学的解明
現代の心の問題に対する解を発信し、学術的責任を果たす未来学術システム

知・神経基盤、発達基盤、進化基盤、社会基盤の科学的解明が飛躍的に進んだ。本計画では、これまでの拠点間連携により積み重ねてきた実績をさらに次のフェーズへと飛躍させるものと位置づけている。具体的には、これまで十分展開できなかった情報科学との連携、そして基礎的知見を実世界に具体的に生かし、実装するために、社会科学、政策科学との連携を強化することを重視している。これまでの成果をシーズとしながら、21世紀の人間社会を覆う「分断」問題、そして調和ある多様性の実現という難題解決に資する学術的、科学的解を見出す事業としたい。

④ 実施機関と実施体制

京都大学・心の先端研究ユニットと東京大学・こころの多様性と適応の統合的研究機構および人間行動科学研究拠点を本マスタープラン事業の扇の要としつつ、玉川大学、自然科学研究機構生理学研究所、大阪大学、名古屋大学、北海道大学、九州大学、広島大学、筑波大学、金沢大学、高知工科大学、慶應義塾大学、中央大学、自治医科大学などからなる国内拠点ネットワークの強化を図る。これらの機関・部局の多くは、これまでも強固な連携のもと研究を進めてきた実績がある。京都大学および東京大学の部局はともに部局横断型のユニットであり、学内の心の先端研究者を結集している。広く、霊長類学、比較認知科学、発達科学、基礎心理学、社会心理学、文化心理学、進化心理学、脳神経科学、精神医学、実験社会科学、人工知能学、情報科学などの分野の専門家がこれらのユニットに参画している。脳神経科学領域については、玉川大学、生理研、慶應大学においても研究を推進する。ロボティクス領域については、大阪大学と東京大学の連携を、また経済学・実験社会科学領域については、大阪大学と高知工科大学との連携を強化する。先述のとおり、これらの機関部局についてはこれまでも連携を進めてきた実績があるが、今回のマスタープランにおいても改めて参画の合意を得ている。

⑤ 所要経費

2020～2025年度の施設整備費として13.2億円、連携拠点運営経費として9億円（毎年度1.5億円×6年間）の総計22.2億円を計上する。施設整備の内訳は、比較認知科学研究棟施設1式（4億円）、MRI施設整備一式（3.2億円）、大規模社会実験システム整備一式（1億円）、胎児・乳幼児発達研究設備一式（1億円）、生涯発達（高齢者）研究設備一式（1億円）、個人情報データベース整備一式（3億円）の7項目である。運営経費の内訳は、大型施設整備維持経費（MRI、比較認知実験設備等の維持経費）、全国共同利用研究経費（先端設備を利用し、国公私立大学等の研究者が共同研究を行うための費用）、全国共同教育経費（先端設備を活用した心の先端科学に関するワークショップ等にかかる費用）、頭脳循環による国際化推進経費（ポストクの国際雇用と交流事業にかかる費用）、学術情報の社会的発信経費、メタ拠点運営経費（東大・京大の主要研究拠点における事務局運営経費）に大分類される。

⑥ 年次計画

【2020-2021年度】

(1) 「心の先端研究」の分科会活動を通じて構築してきた研究拠点間の連携を生かし、今回のマスタープランで掲げた3つの目的（9：目的と実施内容を参照）を達成するうえで新規に必要な連携方法について議論を重ねる（初年度）。2021年度からはその具体化を図る。主軸としての役割を果たす若手研究者を雇用し、連携拠点型の新たな研究体制を実際に稼働させる。(2) 実世界から質の高い大規模データを取得解析するための、国内・国際間の連携体制構築にも着手する。こちらの事業にも、主軸としての役割を果たす若手研究者の雇用が必要である。(3) 未整備となっている装置についてはその現状を打破すべく整備を完了させ、効率的な事業推進を実現する。

【2022-2023年度】

収集した大規模データの見直しを図りつつ、データベースの拡充を進める。その基礎的知見を実世界に生かすべく、経済学・実験社会科学との連携のもと、フューチャーデザインの提言を目指す。

【2024-2025年度】

「心の先端研究」を標榜する国立中核機関の設立を提言する。これまでの研究を総括し、中核機関でさらに発展させる道筋と体制を具体化する。中核機関実現の主軸となるのは、本マスタープランの新たな取り組みを牽引してきた若手研究者となることが期待される。

⑦ 社会的価値

主に以下の3つがあげられる。

(1) 「フューチャーデザイン」の提案：本計画に参画する研究者が、自治体関係者を含む政策担当者や実務家らと協働し、具体的な政策立案を行うことで、次世代の利益を考慮した意思決定や次世代視点にたった未来社会のデザインを提案できる。また、フューチャーデザインを実現しやすい、または妨げるヒトの心の特性を科学的に分析し、その知見を活用した社会制度を提案できる。(2) 多様かつ調和ある社会を保証する精神活動の個人差（脳と心の発達の多様性）に関する科学的理解を提供できる。脳と心の多様性とその発達軌跡に関する大規模データの取得と解析のアルゴリズムを心理学主導で行える分野を開拓できる。(3) 精神発達の個人差を生み出す因子の科学的解明：公認心理師等の協力を得ながら、胎児期から思春期の子どもたちの脳画像、遺伝子、神経心理学的データを収集し、精神疾患の因子を特定する。思春期を中心とする精神発達の問題に事後的に対処するだけでなく、精神疾患の新たな治療、予防医学の道筋を世界にさががけて切り拓くことができる。データはすべてデータベース化し、世界中の研究者が利用可能なアーカイブとして提供する。

⑧ 本計画に関する連絡先

友永 雅己（京都大学霊長類研究所）